

# 天道信仰と天道法師 タクスダマ

## 【日本神話】 なし（対馬固有の信仰）

### 【対馬の伝承・異伝】

7世紀後半、内院（ないいん。厳原町）に高貴な女性が**虚船（うつろぶね）**に乗って漂着し、太陽に感精して子を産みました。「太陽の子」は**天道法師**と呼ばれ、嵐をまとして空を飛び、天皇の病気を治すなどの奇跡をおこします。

豆酸（つつ）の北東に広がる**龍良山（たてらさん）**中の**八丁角（はっちようかく）**。北と南の2ヶ所にある石積み）は、天道法師とその母の墓所とされ、多久頭魂神社境内の不入坪（イラヌツポ）とあわせて「**オソロシドコロ**」と呼ばれ、龍良山という聖域の結界を構成しています。

対馬固有とされる**天道信仰**は、天道法師という超人と霊山・龍良山を中心に、太陽信仰・母子神信仰・修験道・古神道などの要素が複雑に絡み合い、平安時代ころに成立したと考えられています。

**多久頭魂（たくずだま）神社（番号21）**の現在の祭神は天神・天孫系ですが、古くは龍良山を御神体として社殿はなく、対馬固有の**タクスダマ（多久頭魂）**を祭り、神仏習合時代にはタクスダマ=天道法師とされていました。天道信仰の南の中心部・豆酸には**高御魂（たかみむすび）神社（番号22）**が、北の中心部・上県町佐護には**神御魂（かみむすび）神社（番号95）**があり、多久頭魂神は、両社にまつられたタカミムスビとカミムスビの子神とされています。（P7）

豆酸は対馬の南端に位置し、陸路による他地域との交流が少ない反面、航路の拠点として国内外の文化が流入する地域であり、亀トや天道信仰、赤米神事など独自の文化・歴史が形成されてきましたが、近年は過疎・高齢化のため、伝承の存続が危ぶまれています。

なお、龍良山はその強烈なタブーにより、標高120mの低域から山頂558mまで良好な照葉樹原始林（スダジイ・イスノキ・アカガシなど）が残り、国の天然記念物に指定されています。龍良山に入ると、「森の神」が生きていた縄文時代の森の雰囲気を感じることができます。



龍良山原始林（左）と聖地・八丁角（右）